

新井慎一郎短編小説集

かくり世断章

加藤良一

2025年12月4日

埼玉県深谷市の新井慎一さんから一冊の本が届いた。『新井慎一郎短編小説集 かくり世断章』と題する16篇からなる小説集である。

新井慎一郎とはペンネーム。新井さんは、深谷市に生まれ、学習院大学文学部ドイツ文学科を卒業後、深谷市文化財保護審議会会長、深谷市郷土文化会会長などを歴任している。多数の著書があるが、その大部分はかの実業家渋沢栄一研究に関連したものである。自身にまつわる著書は、2014年に上梓した『詩集 母への遠景』※が初出である。この詩集は新井さんの母親への愛がしみじみと表現されている。とても印象的な詩集である。

※ 書評『詩集 母への遠景』

https://rkato.sakura.ne.jp/kotoba/k49_hahaeno_enkei.pdf

そして、この度の『かくり世断章』(2025年)が二冊目となる。『かくり世断章』のあとがきに次のような思いが記されているところを見ると、残る作品としては長編小説を思い描いているようである。

本書は、小説の体をなしているのかどうか分かりませんが、ここ十数年ほどの私の心象風景をえがいたものにちがいません。先に出した詩集に続く文学的営為と申せば申せましょう。大学を卒業した時に、詩集を一冊、短編小説集を一冊、長編小説を一冊出してから死にたいと思いました。

紫陽花もやがて枯れ行く冥土かな 猶香

かくり世とうつし世

かくり世は、幽世、常世ともいい、日本神話、古神道、神道において永遠に変わらない神の領域を指す。黄泉の国も含まれる死後の世界。世界を構成する一方をいい、これに対して現世がある。



■ 川のある風景

『かくり世断章』は、「鴨川にて」にはじまり、「鑓川にて」、「隅田川にて」、「運河にて」と川辺にまつわるテーマが並んでいる。新井さんの生まれ故郷の深谷は、近くを大きな利根川が流れ、そこへそそぐ支流や運河もあちこちにある。そんな川のある景色が新井さんの原風景なのであろう。

私も子供時分から川には馴染みがある。そもそも生まれ育った東京下目黒には目黒川が流れていた。ちょっと遠出をすれば多摩川も遊び場だった。そして今は利根川のほとりに居を構えている。川に特別な感傷があるわけではないが、付かず離れずの親しみをいつも持っている。

かくり世断章

修治の心は、まるで風に吹かれて道端に転々とする枯葉のように、右往左往した。母が亡くなって三年も経つというのに、母のいない寂しさに、なかなか慣れないのだった。三回忌の法要の席で、妹の語る思い出に修治は心を動かされた。小学生の頃、その日学校に提出しなければならない大切なものを妹は忘れてしまった。家に電話して母に届けてもらうことになった。母にきつく叱られることを予想していた妹は、母がこぼれるような笑みとともにその大切なものを渡してくれたことに強い衝撃を受けた。その時妹はもう二度と忘れ物はしまいと心に誓ったという。

新井さんは短編小説の主人公修治に託して、自らの死生観を述べている。新井さんが最も親愛した母方の祖父の死に直面した場面において、まさに死が身近にあり、親しみすら感じられるような経験をしている。

修治は、死者が自分を見つめていると感じることはできた。しかし、死が永遠の眠りである以上、死者との交信はできない相談だ、と思った。それが可能となるためには、みずからが死者となる他ないだろう、とも思った。死者こそ親しいものと感じている修治にとって、それゆえ死は恐ろしいものではなかった。むしろ待ち遠しいもののように感じられた。母の死をきっかけに死者の影が修治の回りによりやく濃くなって来た。

戸外では春の嵐とも言うべき凄まじい風が吹き荒れていた。激しき吹き荒れる風の力で家さえも揺らいでいるかのように感じられた。所詮人は何かの力に揺り動かされて生きているに過ぎないのではないか。何かを求めて生きているように思っただけでも、本当にみずからが望んでそうしているのかと問われれば、何とも心もとない思いがしてならなかった。しかしこの母のいない寂しさだけは本物だと、修治は思った。

■ 渋沢栄一研究者が集う部屋

筆者が新井さんを深谷市のご自宅に訪ねたのは、2021年2月6日、深谷市市民文化会館大ホールにおいて＜歌劇 幕臣・渋沢平九郎＞の初演を行うに際し、渋沢栄一研究の第一人者としてお話を聴きするためだった。そのときに招かれた部屋が『かくり世断章』の最終章「静かな午後」に出て来る渋沢栄一勉強会のために設えられたものだった。

静かな午後

渋沢栄一

父親の施設入所を機に、父親の住んでいた別棟を片付けて勉強会の会場に使うようになったのは、去年の四月からであった。それまでは街中の空き店舗の一角を借りてやっていた。修治の住んでいる深谷市は、近代日本経済の父と称えられる渋沢栄一の出身地でもある。この渋沢栄一の事績について学ぶことが目的の勉強会であった。一年目―「若き日の渋沢栄一」、二年目―「渋沢栄一対比列伝」(日本史上有名な人物、福沢諭吉・伊藤博文・井上馨・大隈重信・大倉喜八郎・成瀬仁蔵・徳川慶喜等々と対比しながら渋沢の人生を考える)、三年目―「渋沢栄一の詩と人生」、四年目―「渋沢栄一の旅と人生」、と進んで来て、五年目の今年は、「渋沢栄一とその周辺 ―郷土篇―」というテーマで、郷土の歴史の基本的なところを押さえながら、これと関連づけながら渋沢栄一の生涯を理解しようというものであった。修治は先ず『新編武蔵風土記稿』を取り上げることにした。

...

『新編武蔵風土記稿』

『新編武蔵風土記稿』は、徳川幕府官選の地誌で、文政十一年(一八二八)に成立した。村の地勢、領主、小名すなわち小字や、寺社、山川、物産等について記したもので、地域の歴史を知ろうとするとき、必ず参照しておかなければならないものの一つであった。渋沢栄一の生まれた血洗島村は、「榛沢郡之三、岡部領」に出て来る。修治は自分が作成した資料にそって説明を始めた。

■ 死生観、死生学、尊厳死

新井さんは晩年に差しかかり、死後のことにあれこれ思いをめぐらせている。死後のことを考えるのは、その間充実した人生を送るという前提があつてのこと。つまりは尊厳死の概念と同じではないか。「馬鈴薯」の章で、主人公修治に「みずからの死が永遠に明けることのない夜であるとしたら、今の自分はそこへ向かう午後の中にあり、その午後はできるだけ静かな午後でありたいと修治は願うのである。」と述べさせている。

しかし、新井さんは、前にも書いたように、長編小説を仕上げるという大きな願いを叶えてからでないと死ねないはずだ。自らの尊厳を保ちつつ、自らの終末を自ら選ぶ。まずはそこへ向かって準備を怠らないことである。

ところで、死と生について、理系と文系にまたがる分野に死生学という学問がある。文字どおり死についての研究分野である。大きく臨床系と人文系に分けられている。臨床系は死にゆく過程や死別後の悲嘆などを理解し、対処する死生学、人文系は死や死後についての哲学的、宗教的な思想や観念、つまり死生観や、埋葬法や葬送の実践などを研究する人文系の死生学である。死生学の開拓者、アリエスによれば、「人間は死者を埋葬する唯一の動物」である。この埋葬儀礼はネアンデルタール人にまでさかのぼり、それ以来長い歴史の流れの中で、人類は「死に対する態度」を養ってきた。死生学は「死

への準備教育」を目的とする学際的な学問分野である。死生学は尊厳死問題や医療告知、緩和医療などを背景に、1970年代に確立された新しい学問分野である。

冒頭に掲げた『かくり世断章』のあとがきに新井さんが込めた思い、すなわち「本書は、小説の体をなしているのかどうか分かりませんが、ここ十数年ほどの私の心象風景をえがいたものにちがいません。」につづき「小説を構成する要素はさまざまですが、短編・長編にかかわらず、事実在即した描写が求められる場面が多く、この人生そのものといかに深く切り結んだかということが如実に現れるとことなり、しばしば困難を覚えます。」と吐露しているが、なるほどそのとおりかもしれない。

主人公に自らの思いを語らせることで小説の形に仕上げてしているわけだが、たとえば、「幸い寿司」の章では、中学時代の恩師の誘いで小さな持ち帰りのみの寿司屋に寄る場面が書かれている。その締めくくりに「(小説の都合上、史実の一部を省略しました。)」と、わざわざ断っている。新井さんの誠実さが垣間見られるところである。

【 新 井 慎 一 著 書 】

- 渋谷栄一とその周辺 新井慎一 著(博字堂 2012 深谷ふるさと文庫)
 - 若き日の渋谷栄一：事上磨練の人生 新井慎一 著(ててて叢書；第1巻 2014)
 - 渋谷栄一を生んだ「東の家」の物語—渋谷栄一出世のルーツを探る—
新井壽郎 監修、新井慎一、井上善治郎、長島二三子 編(郷土出版社 1998)
 - その他写真集など多数あり 新井慎一 著(博字堂 2002 深谷ふるさと文庫)
 - 目で見える熊谷・深谷・大里の100年
-

[Back](#)

[ことば／文芸 TOP へ](#)

[Home](#)

[Home PageTOP へ](#)